クコト鼠聲ノ如シ、肥前　一種ハンドウユルカハ黑色ナリ、ソノ鳴ク聲モウト言ガ如シ、同上　一種入道ユルカハ、背上短下長ク潮孔左右ニアリ、腹下ニ筋ノ如キ者出ヅ、末尖リ長サ八寸許、引出セバ二尺餘アリ色赤シ、是雄ナル者ナリ、佐州　一種スヂイルカハ堅ニ白條アリ、紀州　一種カマイルカハ、形ノ似タルヲ以テ名ク、同上　此外尙品類アリ、

〔古事記中仲哀〕故建內宿禰命率其太子神應爲將禊而經歷淡海及若狹國之時、於高志前之角鹿造假宮而坐、爾坐其地伊奢沙和氣大神之命見於夜夢云、以吾名欲易御子之御名、爾言禱白之恐隨命易奉、亦其神詔、明日之旦應幸於濱、獻易名之幣、故其旦幸行于濱之時、毀鼻入鹿魚旣依一浦、於是御子令白于神云、於我給御食之魚、故亦稱其御名、號御食津大神、故於今謂氣比大神也、亦其入鹿魚之鼻血臭、故號其浦謂血浦、今謂都奴賀也、

〔古事記傳三十一〕此魚の依れるは、大神の太子に、御饌の料に獻り給へるにて、卽是かの易名の幣の物なり、さて今此魚の悉く鼻の毀れたる所以は、大神の旣に捕らしめて獻り給ふ由なり、そのれば、人の目には見えず、さるは古に此魚を捕るには、鼻を衝てぞ捕つらむ、故鼻の毀れてはありしなり、（中略）入鹿はいかにして捕にかゝられども、此段を以て思ふに、古必鼻を衝て捕しなるべし、紀國の熊野浦の漁人の語りけらくは、此魚多くは長八九尺ばかりあり、中に最大なるは一丈二三尺ばかりなるもあるなり、入鹿の千本づれとも云て、頭をもたげて、おびたゞしく群來る物なり、逃こといと早くして、船をいかに早くこぎても追及がたし、故これを捕るに貧なるには、毛理なと云物に、夜那波とて四十尋の繩をつけ、其端に泛を付て、そのほにぐるを又二の毛理を投て捕なり、さて一ッ捕れば必二ッ捕らるゝ、其故は一ッが毛理を貪て逃るに後れぬれば、友をあはれむにやあらむ、群の內の今一ッ必後れて遠くは去らざる故に、それをも捕なりき、抑毛理は虛空へ高く投上げたるが、魚の上に至りて、そらよりまくだりに落降りて其魚を衝物なり、かくて入鹿は、鼻の上に向ひたれば、その鼻を衝べきなり、然らざれば毀鼻と云こと由なし、谷川氏が、蓋此魚鼻向上而有聲、故云毀鼻と云るは心得ず、こはから書に海豚鼻在腦上作聲噴水直上と云るに依て云るなれど、其は凡て此魚の常なれば、分て殊に、毀鼻と云べきに非るをや、

〔出雲風土記島根郡〕凡南入海所在雜物、入鹿略○中海松等之類至多、不可盡名、

〔源平盛衰記四十三〕知盛船掃除附占海鹿并宗盛取替子事